

通信制高等学校のサポート校に通う 高校生のレジリエンスに関する一考察

Study on the resilience of the high school students who go to the support school of a correspondence high school.

原 郁水*・古田 真司**

Ikumi HARA*・Masashi FURUTA**

要 旨

本研究では通信制高校のサポート校に通う生徒のレジリエンスと継続的な適応状態を明らかにする目的で9名を対象に、レジリエンス、セルフエスティーム、ソーシャル・サポートについて1回の調査を、適応状態(KOKOROスケール)について最多で7回、最少で2回の調査を行った。

その結果、性別や通学期間、通学頻度などによってレジリエンスや適応状態に有意な差がないことを明らかにした。また、レジリエンスによって低中高の3群に分けた際の経時的なKOKOROスケールの変化を見ると、レジリエンス低群の方が中群や高群よりも変動が小さいことが認められた。これは、筆者らが行った中学生に対する調査と同様の結果であった。一時的に適応状態が下がり落ち込むことには、回復しやすいという肯定的な面があるのではないかということが示唆された。

キーワード：通信制高校、サポート校、レジリエンス、KOKOROスケール、ソーシャルサポート

1 はじめに

通信制高校とは、通信制課程を置く高等学校の通称であり、学校教育法の第54条第1項では「高等学校には、全日制の課程又は定時制の課程のほか、通信制の課程を置くことができる。」第2項では「高等学校には、通信制の課程のみを置くことができる。」と定められている。通信制高校では、添削指導と面接指導が行われる。通信制の課程を置く学校数は平成12年度は113校(独立校25校、併置校88校)そのうち公立校が69校(独立校6校、併置校63校)私立高校が54校(独立校19校、併置校25校)、平成22年度は学校数が209校(独立校88校、併置校121校)、そのうち公立高校が70校(独立校7校、併置校63校)、私立高校が137校(独立校81校、併置校56校)、直近の調査である平成30年度は252校(独立校110校、併置校142校)、そのうち公立高校が78校(独立校7校、併置校71校)、

私立学校が174校(独立校103校、併置校71校)である。全体的に学校数は増加しており、特に私立学校の増加数が顕著である。生徒数を見ると、平成12年度は約182,000人(男子約102,000人、女子約80,000)、平成22年度は約188,000人、平成30年度で186,502人(男子97,307人、女子89,195人)となっている。人数は横ばいであるが、全日制高校の生徒数が平成12年度の4,165,434人から、平成30年度には3,150,378人と減少していることを考慮すると、割合から見れば増加していると言える^{1~3)}。これは通信制高校が果たす役割の変化が一因であると考えられる。通信制の課程は全日制・定時制の高校に通学することができない青少年に対して、通信の方法により高校教育を受ける機会を与えるものである。近年においては、従来からの勤労青少年に加えて、全日制課程から転・編入学する生徒や過去に高校教育を受けることができなかった生徒など入学動機や学習歴が多様化している⁴⁾。たとえば、平

* 弘前大学教育学部教育保健講座
Department of School Health Science, Faculty of Education, Hirosaki University
** 愛知教育大学教育学部養護教育講座
Department of School Health Sciences, Aichi University of Education

部ら（2016）の調査によると、ある通信制高校に入学した理由として最も多かったのは学習時間・ペース上の理由の271人（36.8%）、次が学力上の理由の241人（32.7%）、3番目が前校での不適応の189人（25.7%）であった⁵⁾。また通信制高校に通う生徒の内14.6%に不登校経験があった⁶⁾。八原・杉原（2019）でも、昨今の定時制・通信制高校では働きながら学習したいという動機によって入学する生徒よりも不登校経験がある場合や身体的な病気などの理由による学業不振、発達障害のため入学する生徒等が多いということが指摘されている⁷⁾。また、通信制高校には転入編入者が多いという特徴がある。高校中退は1990年代半ばをピークに減少が続いているが、その一因として、高校を中退するのではなく、通信制高校へ編入が選択されることがあるという指摘もある⁸⁾。このように、高校全入時代と言われる現代において、通信制高校は様々な背景を持つ生徒の受け皿になっていると考えられる。

このような背景を持つ定時制高校の生徒の適応に関していくつか調査が行われている。平部ら（2016）は、通信制高校の生徒に精神的健康度を尋ね、国民生活基礎調査で行われた同様の調査の15-19歳に関する結果と比較している。その結果男女共に国民生活基礎調査での得点分布よりも通信制高校の生徒の方が精神的健康度は低い状況にあることを明らかにした⁹⁾。また、金子・伊藤（20）は通信制高校に通う不登校経験のある生徒に対して、小中学校の不登校からの回復状況について尋ねた。その結果、187名中51名が不安定（いつ戻るかわからない）、62名が意識しない（考えない、考えないようにしている）と答えており、安定（もう不登校時代に戻らないと思う）と答えたのは60名と約3割程度に留まっていた⁹⁾。以上より通信制高校に在籍する生徒には様々な背景があり、適応状態がよいとは言えない生徒や、困難な状況に直面している生徒、回復の途上にいる生徒が存在していると考えられる。

通信制高校に在籍する生徒への支援の一つとしてサポート校が存在している。東村（2004）によるとサポート校とは、通信制高校に通う生徒の卒業資格取得をサポートする私塾であり、主に塾や予備校などを経営する教育関連企業がその母体となっている¹⁰⁾。通信制高校においては数回のスクーリング（面接指導）とテストのみで、後は自学自習で学習を進めるため、不登校経験のある生徒や他の高校に合わずに編入してくる生徒には支援が十分であるとは言えない。そのため、サポート校は通信制高校と提携し、レポートやテ

ストのための授業等によって生徒の学習や卒業を助けており、さらに精神的な居場所としての役割も期待されている。通信制高校に在籍しサポート校に通う生徒（以下、サポート校生徒）を対象とした研究として、不登校経験者は不登校経験時よりも現在の方が、ストレス反応、学校ストレスが低く、ソーシャル・サポート感が高いということは明らかになっている¹¹⁾。しかし、十分な研究が行われているとは言いがたい。

そこで本研究では、サポート校生徒のレジリエンスと継続的な適応状態に着目する。レジリエンスは広義には「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する能力・過程・結果」と定義される¹²⁾。本邦においては、精神的回復力、弾力性等と訳されることが多い。本研究では原（2019）に倣い「困難に直面した際の適応や、回復を導く能力や心理特性であり、高めることができるもの」と定義することとする¹³⁾。過去に様々な困難や課題に直面したことがある、あるいは回復中である、もしくはこれから直面すると考えられるサポート校生徒にとってレジリエンスは重要であると考えられるが、我が国ではこれまでほとんど報告されていない。そのため、本研究ではサポート校生徒のレジリエンスを明らかにし、さらに、レジリエンスの違いによる継続的な適応状況の差異を検討する。これらによってサポート校生徒の適応状態の特徴を明らかにできるのではないかと考えられた。

2 方法

（1）調査時期

2018年11月初旬から12月中旬にかけて実施した。調査項目のうちKOKOROスケールは多い生徒で7回、少ない生徒で2回測定を行った。そのほかの尺度については11月初旬に1回測定を行った。

（2）調査対象

A県にある私立通信制高校のサポート校1校に通う生徒9名（男子5名、女子4名）を対象とした。対象者の通学月数は1ヶ月から24ヶ月、通学頻度は週に1回から5回である。

（3）調査方法

生徒と信頼関係を構築し、調査を正確かつ円滑に進めるために、調査時期の約1か月前から、調査者（大学生）が毎週金曜日にサポート校に通い、生徒と関わった。調査開始日の2018年11月からは、関わり合い

を継続しながら、調査者またはサポート校の職員が、ID番号と通学年数、性別を記入したのち無記名自記式質問用紙法を用いて1名ずつ登校時に実施した。そのため、測定は多いもので7回、少ないもので2回行っている。

(4) 調査項目

① フェイス項目

調査対象者の性別、通学期間、通学頻度について尋ねた。

② レジリエンス

小塩ら(2002)が作成した精神的回復力尺度¹⁴⁾を参考に昨作成された原・都築(2015)の小学生版レジリエンス尺度を使用した¹⁵⁾。「未来志向」「興味関心の追求」「感情調整」の3因子から構成され、「いいえ」から「はい」までの5件法で回答を求める尺度である。それぞれの因子について、「未来志向」は「自分の目標を大事にしている」、「自分には将来の目標がある」、「自分の将来に希望をもっている」などの5項目から成る因子であり、未来の目標を持ち前向きに努力することを表している。「興味関心の追求」は「ものごとに対する興味や関心が強いほうだ」、「いろいろなことに挑戦するのが好きだ」、「新しいことやめずらしいことが好きだ」などの5項目から成る因子であり、様々なことに興味や関心をもち、それを追求しようとすることを示している。「感情調整」は「いつも落ち着いているようにこころがけている」、「おどろくことがあっても、自分を落ち着かせることができる」、「感情をうまくおさえることができる」の3項目から成る因子であり、自分の感情を抑え、調整することを表す。これら13項目の合計得点をレジリエンス得点として使用した。

③ KOKORO スケール

適応の指標として、独立行政法人理化学研究所の開発した気分測定システムである「KOKORO スケール」¹⁶⁾を使用した。KOKORO スケールは10cm四方の二次元空間の中で安心感-不安感を横軸、ワクワク感-イライラ感を縦軸とした2軸の気分尺度として設定した4象限マトリクスである。各軸には中心を0として-100から100までのメモリが振られている。横軸では100の右側に安心感、-100の左側に不安感、縦軸では100の上側にワクワク感、-100の下側にイライラ感と記載した。数値が高いほど安心-不安次元では安心していることを、ワクワク-イライラ次元ではワクワクしている(モチベーションが高い)ことを、つまり

どちらも点数が高いほど心理的に適応的であることを示している。この4象限の中で生徒がそのときの気分を示す位置に点を打つことで、直感的な気分を表現することができる。この2軸をそれぞれ-100から100点まで得点化し、安心-不安感、ワクワク-イライラ感を追跡した。

④ セルフエスティーム

星野¹⁷⁾による自尊心尺度10項目を用いて測定した。「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」の4段階で回答を求めた。段階順に4点~1点に点数化し、合計点をセルフエスティーム得点とした。

⑤ ソーシャル・サポート

久田・千田・箕口(1989)によって作成された学生用ソーシャル・サポート尺度の中学生版16項目から知覚されたサポートに関する6項目について尋ねるよう修正された石毛・無藤(2005)のソーシャル・サポートに関する項目を用いた¹⁸⁾。「あなたは、あなたの周りの人たちがどれくらいあなたの助けになっていると感じていますか。一番よくあてはまるところに一つだけ○をつけてください」と教示し、親、兄弟、先生、友達の4つのサポート源別に「当てはまる」から「当てはまらない」までの4段階で回答を求めた。得点が高いほど、相手からサポートのサポート認知が高いということを示す。それぞれ親サポート得点、兄弟サポート得点、先生サポート得点、友達サポート得点とした。

(5) 倫理的配慮

質問紙による調査の実施に当たり、説明を口頭で行った。また、質問紙の提出は自由意志によるものであり、提出しないことによる不利益はないこと、結果の分析に当たっては、個人情報特定されないように配慮することを伝えた。そのうえで了解の得られた生徒から提出を受け、質問紙の提出をもって同意したとみなした。

3 結果と考察

(1) サポート校生徒の特徴

サポート校に通う9名の生徒の性別、通学期間、頻度、レジリエンス、セルフエスティーム、サポートについて表1に示した。通学期間(月)は、M=13.89、S.D.=7.415であった。1年以上通学しているものが7名、半年未満のものが7名であり、長期通学者と短期

表1 各調査対象者の属性及び得点

対象者	性別	通学 期間 (月)	通学 頻度 (週)	未来 志向	興味 関心	感情 調整	レジリ エンス	SE	親サ ポート	兄弟サ ポート	先生サ ポート	友達サ ポート	サポー ト 合計
A	1	24	1	17	17	10	44	15	9	6	6	14	35
B	2	3	1.5	22	18	8	48	20	19	20	11	17	67
C	1	20	2	17	16	11	44	27	22	6	6	18	52
D	1	12	2	23	20	11	54	28	18	14	19	23	74
E	2	12	4	16	25	15	56	30	17	14	20	18	69
F	1	1	3	13	13	12	38	31	24	6	6	6	42
G	2	19	3	24	18	10	52	31	18	15	22	22	77
H	1	20	5	14	23	8	45	37	9	6	10	21	46
I	2	14	2	25	24	15	64	38	17	14	16	17	64
M		13.89	2.61	19.00	19.33	11.11	49.44	28.56	17.00	11.22	12.89	17.33	58.44
S.D.		7.415	1.197	4.269	3.771	2.424	7.410	6.946	4.807	4.984	6.100	4.807	14.214

表2 各調査対象者の KOKORO スケール得点

対象者	KOKORO スケール (安心-不安得点)							KOKORO スケール (ワクワク-イライラ得点)						
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
A	-10	-50						12	-50					
B	0	36						-20	10					
C	-40	-26						20	20					
D	-40	4						-25	-30					
E	-40	-40	-100	-100				16	-23	-100	-100			
F	35	0	0	0				44	0	0	0			
G	38	0	6	-40	-82	20	-60	-54	0	84	6	10	20	-4
H	30	21	48	40				60	66	54	70			
I	22	90	48	92				80	90	51	86			
M	-5.44	3.90	0.40	-1.60				14.78	9.22	17.80	12.40			
S.D.	31.067	40.129	54.117	65.810				40.430	42.321	64.790	65.671			

通学者に分かれた。通学の頻度は(回/週) M=2.61回、S.D.=1.197であった。短いもので週に1回、長いもので週に5回であった。レジリエンスは未来志向が M=19.99、S.D.=4.269であった。興味関心の追求は M=19.33、S.D.=3.771であった。感情調整は M=11.11、S.D.=2.424であった。レジリエンス合計は M=49.44、S.D.=7.410であった。レジリエンスの平均値は興味関心の追求が最も高くなっていた。SEは M=28.56、S.D.=6.946であった。サポートに関しては、親サポートが M=17.00、S.D.=4.807、兄弟サポートが M=11.22、S.D.=4.984、先生サポートが M=12.89、S.D.=6.100、友達サポートが M=17.33、S.D.=14.214であった。サポートの近くは友達サポートと親サポートが兄弟サポートや先生サポートよりも高くなっていた。この結果は齋藤らのサポート校生徒の現在のソーシャル・サポート感に関する調査の母親と友人からのサポート知覚が高いという結果と一致していた¹¹⁾。

性別ごとに、レジリエンス各得点と SE、各サポートについて t 検定を行ったところ、いずれも性別による有意な差異は認められなかった。また、通学期間、通学頻度の中央値でそれぞれを2群に分け、レジリエ

ンス各得点と SE、各サポートについて t 検定を行ったところ、いずれも有意な差異は認められなかった。サポートについても同様に分類し、レジリエンス各得点と SE について t 検定を行った。有意な差異は認められなかった。サポート校に長く通える、あるいは頻繁に通えるということとはある程度その状態に慣れ、適応できているということと関連があるのではないかと考えたが、これらの間に関連は認められなかった。これらから、過去に様々な困難や課題に直面したことがある、あるいはこれから直面する可能性があると考えられるサポート校生徒のレジリエンスやセルフエスティーム、ソーシャル・サポートは個々にさまざまであり、また総じて低いとは言い難い結果であった。このことは、サポート校に通うことができている生徒に関して言えばばらつきはあるものの心理的なサポートを受けていると見なすことができる結果であった。

(2) KOKORO スケール得点

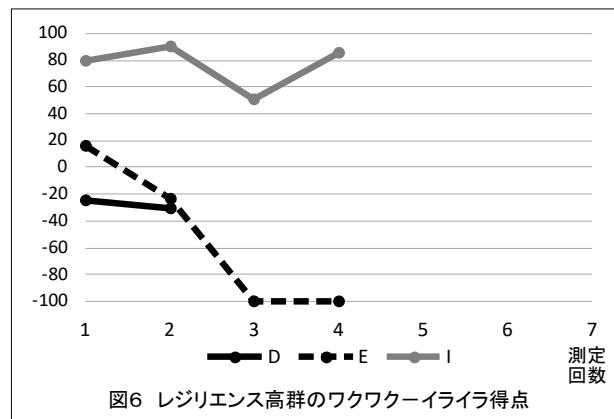
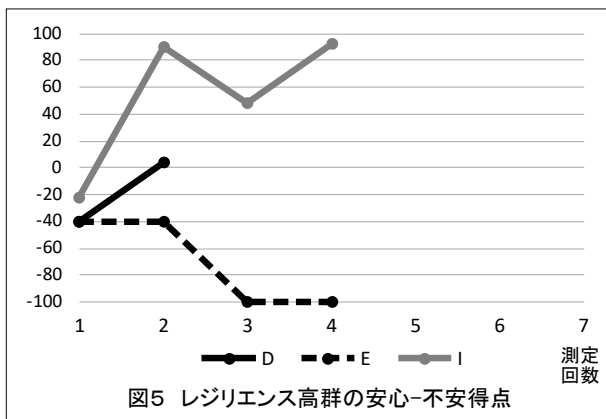
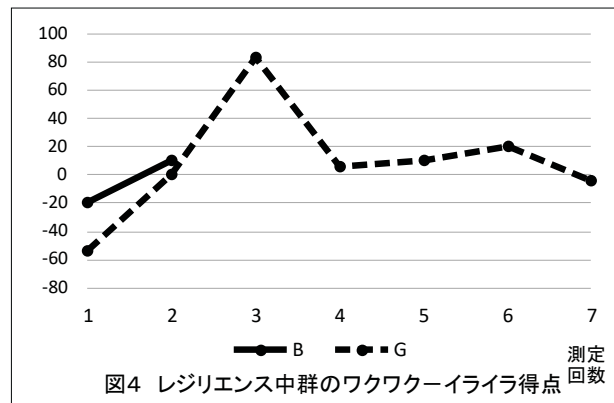
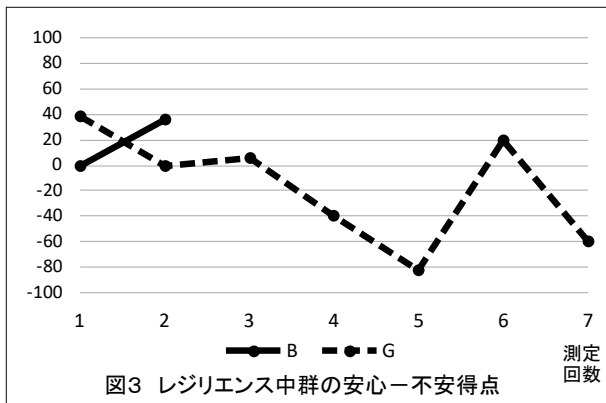
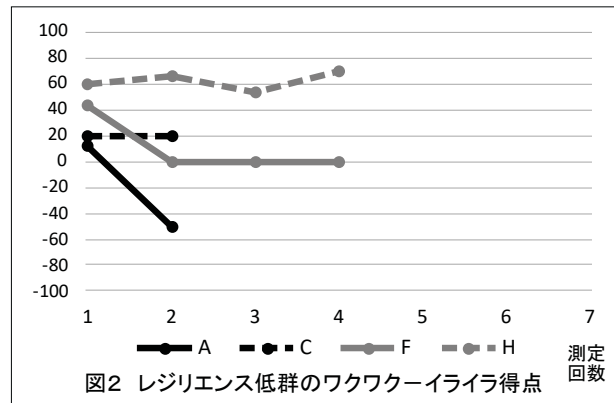
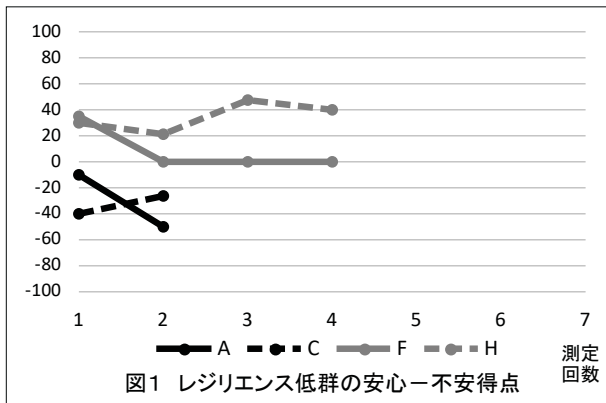
各対象者の KOKORO スケール得点を測定時期ごとに表2に示す。7回すべての測定に参加したのは G のみであり、4回測定できたのが4名、2回測定でき

たのが4名であった。安心-不安得点を見ると、すべてマイナス得点だったものが3名、ゼロからプラス得点マイナス間の変動が見られたものが4名であった。マイナスにとどまる生徒は安心-不安得点よりも少なかった。

(3) レジリエンスと KOKORO スケール得点の変動

レジリエンス合計得点の平均値±1/2標準偏差からレジリエンス低群、中群、高群の3群に分けた。低群にはA、C、G、Hの4名が、中群にはB、Gの2名が、高群にはD、E、Iの3名が当てはまった。群ごとにKOKOROスケール得点の変動を図1～6に示した。低群の安心-不安得点を見ると、得点の変動が多くても±40に収まっていることがわかる。それに対し

て中群と高群の特に4回以上測定ができていたものを見ると、±100点以上の変動があり、上下している。同様にワクワク-イライラ得点を見ると、レジリエンス低群では±60程度の変動が最も大きな変動であり、他の3名は±0～44程度に収まっているが、中群は±30～138、高群は±5～116程度の変動が認められる。中学生のKOKOROスケールを継続的に測定した原ら(2019)では、レジリエンスが低いものよりも高いもののほうがKOKOROスケールの変動が大きいことが指摘されている。特にストレスがある場合はレジリエンス低群よりも高群の方が変動が大きかった¹³⁾。サポート校に通っている生徒についても同様で、レジリエンスが高い方が適応状態の変動が大きいことが明らかになった。サポート校に通う生徒のストレスに関し



ては調査していないが、中学生ではストレスがありかつレジリエンスが高いものの変動が激しかった¹³⁾ことから、サポート校に通う生徒にはストレス状態にあるものが多いということも考えられる。また、この結果はレジリエンスが高いものは様々な体験や出来事から感じたり気づいたりする力が高く、落ち込んだり回復したりすることを示唆している可能性がある。少しのことに落ち込むということは否定的にとらえられがちであるが、その後の回復という点からみると、落ち込まない方が回復し難いという可能性も考慮すべきかもしれない。今後の検討を待たれる。

4 本研究の限界

本研究は9名に対する調査であったため、統計的な検討を行うことがほとんど出来なかった。また、調査のタイミングによって、継続的に調査を行うことが出来なかった者もいた。さらに、生徒の背景などは個人情報などの点から知ることが出来なかった。これらは本研究の限界である。今後、サポート校の生徒についてさらにストレス等も含めた回復や立ち直りといった点からの検討が行われることを期待する。

本研究は、日本学術振興会科学研究費・若手研究(B) 課題番号17K14028 (研究代表者：原郁水) の助成を受けて実施した。

5 引用文献

- 1) 文部科学省 (2001) 学校基本調査—平成12年度調査結果の概要—。(2019年7月アクセス)
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001055497&tclass2=000001055678&stat_infid=000015768679
- 2) 文部科学省 (2011) 学校基本調査—平成22年度調査結果の概要—。(2019年7月アクセス)
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/_icsFiles/afidfile/2010/12/21/1300352_1.pdf
- 3) 文部科学省 (2019) 学校基本調査—平成30年度調査結果の概要—。(2019年7月アクセス)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/icsFiles/afidfile/2018/12/25/1407449_2.pdf
- 4) 文部科学省 定時制・通信制課程について。(2019年7月アクセス)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/04033103.htm
- 5) 平部正樹・林寛子・藤後悦子・藤本昌樹 (2016) 通信制高等学校における生徒の精神健康 東京未来大学研究紀要、9、167—178.
- 6) 財団法人 前項高等学校定時制通信制教育振興会 (2011) 高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究。(2019年7月アクセス)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afidfile/2012/05/29/1321486_01.pdf
- 7) 八原るみ・杉原潤嗣 (2019) 定時制・通信制高校におけるソーシャルスキル能力を高める取り組み—コース別総合学習での試み—。鳴門教育大学学校教育研究紀要、33、103—110.
- 8) 酒井朗 (2018) 高校中退の減少と拡大する私立通信制高校の役割に関する研究：日本における学校教育の市場化の一断面。上智大学教育学論集、52、79—92
- 9) 金子恵美子・伊藤美奈子 (2019) 小中学校における不登校経験者の通信制高校での適応—行動面(登校状況)と意識面(不登校への今の気持ち)に着目して、埼玉純真短期大学研究論文集、12、29—36.
- 10) 東村知子 (2004) サポート校における不登校生・高校中退者への支援—その意義と矛盾—。実験社会心理学研究、43 (2)、140—154.
- 11) 齋藤香織・松岡恵子・黒沢幸子・森俊夫・栗田広 (2005) 不登校生のメンタルヘルス—通信制サポート校に在籍する不登校経験者への調査から—。こころの健康、20 (1)、36—44.
- 12) Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990) Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and psychopathology*, 2(04), 425—444.
- 13) 原郁水・古田真司・伊藤美咲・小西櫻子 (2019) 中学生のレジリエンスと心理的適応状態の変化—KOKORO スケールを用いた合唱コンクール前後4週間の縦断的研究— 養護実践学研究、2、63—72.
- 14) 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—。カウンセリング研究、35 (1)、57—65.
- 15) 原郁水・都築繁幸 (2015) 小学5年生のレジリエンスと回復経験との関連。日本教育保健学会年報23、25—32.
- 16) 片岡洋祐・武坂寿夫 (2012) 気分の動きをみる新しい技術「KOKORO スケール」。自動車技術、66 (12)、86—90.
- 17) 星野命 (1970) 感情の心理と教育。児童心理、24、1445—1477.
- 18) 久田満・千田茂博・箕口雅 (1989) 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1)。日本社会心理学会第30回大会発表論文集、143—144.

(2019. 8. 9 受理)